

# 第18号 華山会報

平成19年4月11日  
財団法人華山会

## 堅忍不拔

財団法人華山史学研究会講師 吉川 利 明



華山史学研究会は、渡辺華山の『駄舌或問』および『外国事情書』の解説に取組んだ。それに関連して『客坐掌記』第十三（天保八年）および『客坐掌記』第十五（天保九〜十一年）に重要な手控えがあることを知った。

『客坐掌記』第十三に、蘭語standvasterがある。「○リュスの帝ニコラス スタントハステル リュス八実ニ子バリ強シ、其見習ヲエンゲルス致申候」とある。『駄舌或問』には、ロシアは「氣質深沈、思慮遠大にして、…」とある。standvasterは、堅忍不拔の意味で、『外国事情書』に「欧羅巴夷人ノ堅忍ハ其性ニ可有御座候」とある。

これは、『皇清朝経世文編』海防篇の張甄陶「論澳門形勢状」の「且夷性堅忍過人、凡所規画、期於必遂」の引用である。華山は、「西夷共深認積思ヲ以テ、種々様々ノ規画ヲ致候事」と記している。華山は『皇清朝経世文編』を羽倉外記から借用していた。『客坐掌記』第十五に、「○四月六日晴、…○還経世文編海防篇三巻於羽倉真令…」と記されている。

「堅忍」は、肯定的な評価である。日本人は、テンション民族などといわれる。西洋人は、tense = easy などといって、緊張するなという。堅忍不拔は西洋的な特性である。日本人は、熱しやすく、冷めやすいといわれる。パフォーマンスがいいという風潮があるが、堅忍不拔が評価されなければならない。しかし、評価されない性格もある。張甄陶『澳門図説』の引用であるが、西洋人は「其性喜人而怒獸」（唐人ノ人ノ申ゴトク、喜ハ人也、怒レバ獸也）と、否定的な評価である。

なお、『客坐掌記』第十三には、「南風強相成砌、マキルノ図、風に向ひ走ル」がある。モリソン号が薩摩山川港に現われた情報である。また、『駄舌或問』の下書きと推定される字句が多数ある。『客坐掌記』第十五には、五月十四日に迫った蛮社の獄を予告した「五月六日…訪小田切氏燈下二見ル、此日主人予履虎尾ノコトヲ云トモ自信セス、必流言ノ達タルナルベシ」がある。



田原城跡 桜門

# 華山の武士道

田原市教育長  
瓜生 堅吉

今は物言わぬ華山に尋ねたいことが幾つもある。

「武ヲコソジ徳ヲ敷キ」と言っている。この「こつ」の字は手偏の「搆」のように見える。「搆」でも意味は変わらないが、手偏が正しいと思う。

武を搆えるとは軍備を整えることであり、徳を敷くとは道徳心を高めるのではなく、徳政（仁政）を敷く意味になる。これは文武両道の教育的な意味ではなく、政治的配慮ということになる。

三宅友信記『華山先生略伝補』にこんな記述がある。  
年少の輩に文学を勉勵せしむと雖も、亦能く武芸を奨揚したり。藩中、従来撃剣の技、直心流を伝え、所謂形剣術にして、ただ心胆を錬磨するを要旨として、絶えて進退機変の術に涉らず、其れ実用に益なきを悟り、藩士の柔懦に傾かんを憂え、当時の劍客杉山大助、斎藤弥九郎等を迎え

て請いて教授せしむ。

当時、江戸で「位は桜井」「技は千葉」「力は斎藤」と言われ、桜井は鏡心明智流桜井春威の土学館、千葉は北辰一刀流千葉周作成政の玄武館、斎藤は神道無念流斎藤弥九郎善道の練兵館であった。

この神道無念流撃剣館の岡田十松吉利の門下に、後の練兵館の斎藤弥九郎を筆頭に、江川太郎左衛門英龍、藤田東湖、渡辺華山、鈴木斧八郎等の名が見える。

さて、ここが問題である。華山は本当に神道無念流の使い手だったのだろうか。華山崇拜者に水をさすようで恐縮であるが、今回、これが一番の問題点で、未だに確証を見出せない。

私の見る限り、華山の『富画堂日記』や『華山先生謾録』にも、他人の記録にも、華山が武道の修行に励む姿もなければ、技を誇示する記述も見当たらなかった。木村紀八郎著『劍客斎藤弥九郎伝』には、「華山は生活のために剣術修行に気を向ける余裕がなかった」とある。しかし、武道や軍備にかなり関心があつたことは周知の事実である。

宮本武蔵作「枯木鳴鶴（めいげき）

図」（和泉市久保惣記念美術館蔵）がある。鴉は「モズ」のことである。この保存箱の裏にあるという華山の審鑑謹書は見えない。



ともあれ、武蔵の画法は輪郭を取らずに一気呵成に筆を走らせる没骨（もっこつ）法、部分を抽出する減筆の手法である。筆を地から天に一気に迫り上げる剣術の勢法である。筆線を気の脈絡とすれば、写実を越えた写意の妙がある。

華山の作品にも筆勢鋭く気が充実に、剣気のみぎる作品がある。華山が名を連ねた神道無念流も、下段から上段に迫り上げる技法がある。命を切り裂く剣線は、命を表す筆線であるだろうか。

## 目次

題字「華山会報」華山会理事

小澤耕一

P 賢勇不拔

吉川利明

P 田原市教育長

瓜生堅吉

目次

P 画家渡辺華山の心象

『富峰驟雨図』

P 「外国事情書」

田原藩の参勤交代について

P 渡辺華山の

「自律狂歌草稿」鑑賞(10)

P 華山の田原行(二)

華山・史学研究会研修視察

P 財団法人華山会から案内

田原市博物館

画家渡辺華山の心象

富峰驟雨図

天保五年（一八三四）絹本墨画

縦七九・〇cm 横一一五・六cm

常葉美術館蔵

落款に「富峰驟雨図 画為松風老人 時天保甲午龍潜月 華山外史登」とある。

「画面右半分に山頂に雪を頂く富士山を描き、左半分にその麓にあたる集落を大きく描く。富士の中腹から下にかかる雲の下には画面向かって右から左下に激しい雨がふりそそぐ様子を墨の濃淡のみで描く。水面に浮かぶ小舟には、集落へと急ぐ漁夫が見える。描かれた黒色に目をこらすと、その人物は、自然に立ち向かう人の姿を見る者に思い起こさせ、空想上の風景ではないことを感じさせる。上空に浮かぶ霧は遠近感

を表出するのに役立つている。江戸からも見えた富士山であるが、華山が富士山を描いたものは多くはない。また、原本は行方不明であるが、昭和十年十二月一日に発行された額

面一銭五厘の昭和十一年年賀用郵便切手に渡辺華山の「富嶽の図」が採用されている。中央に富士と輪郭に「松竹梅」をあしらったものである。

款記には「松風老人」のためと記され、松風は掛川宿の富豪で文人の大庭松風（一七六八〜一八四六）のことか。松風は東海道を往来する文人墨客との交際で知られ、谷文晁が



滞在したり、江戸の読本作家、曲亭馬琴（一七六七〜一八四八）もその著書『羈旅漫録』の中で「掛川下復町の大場（ママ）氏通稱大助松風亭

を号す八。遠州第一の好事家なり」と述べ、馬琴から松風に宛てた書簡もあり、馬琴自身も遊歴の際、松風宅に数日逗留し、秋葉山に参詣している。松風は書画蒐集においても有数のコレクターとして知られ、絵は掛川藩御用絵師で、平井顕齋・福田半香もならった村松以弘（一七七一〜一八三九）に学び、墨梅図を得意とした。

華山は前年の一月二十二日に江戸を出立し、同二十九日に田原へ到着している。その後、四月には福田半香が田原の華山を訪ね、画弟子となっている。五月一日に江戸へ到着するまで渥美半島沿岸を中心に伊勢湾に浮かぶ神島や佐久島、吉良、藤川、拳母、岡崎、吉田などを訪ねている。龍潜月とは十一月のことである。華山と松風の関係は詳らかではないが、東海道を旅した途上で面識を得たか、福田半香の紹介か、引き合わせによるものであるうか。

田原市博物館学芸員

鈴木利昌



渡辺崋山

「外国事情書」②

研究会長 渡辺 亘 祥

一、右之通 古今大変化仕候得共、大道八何レノ国々トモ、今ハ古ニ及バズ候得共、物理ノ学ハ古ハ今ニ及バズ候テ、按ズルニ、夷人共大道ヲゴットレイキト申、神ノ学ト仕候。神ハ心ニテ、心ヲ脩ルハ身ヲ脩ルニテ、身ヲ脩レハ、タダチニ神也ト申心ニテ、ゴットレイキト称シ、則古ハ八徳ヲ以テ王ト相成候。

一、右のとおり、古今の間には大きな変化がありました。大道（人倫の道）については、いずれの国々も、今は昔におよびません。しかしながら、物理の学（自然科学）は、昔より現在にまさっております。

思つに西洋人は、大道のことをゴットレイキといい、神学を意味します。神は心に宿り、心を修めることは身を修めることを意味して、ただちに神となる境地に達することを意味します。そこで大道のことをゴットレイキと名付け、古代では、徳のある者が王となりました。

後世人智相開ケ、素朴ノ風却テ衰ヘ、事モ益煩多 ツツク ニ罷成、一人ヲ以テ兼治メガタク、又從テ、神人モ世出不致、終ニ教政ニ道相分レ、コレヲレクツゲレルドヘイトト称シ申候。周礼ニ師儒ヲ分チ候趣キニ御座候。乍去教政ニ道立候テモ、人生ノ急ナルモノ、医ニアラザレバ救フコト能ズ。右故、古ハノ神人ハ呪禱 マジナイ 療治ヲモ兼備仕候。是以後世兼治ルコト能ハザル故、医道専門 モツハラ ノ学興リ、コレヲゲネースキユンデト称シ申候。

後世になると、人智がひらけ、素朴な風俗が衰えたため、何事もますます複雑になり、一人でいっさいを兼ね治めることができなくなり、したがってまた、神人のような存在もあらわれず、ついに教化と政治の二道が分離したのではありません。そのうち政治の道は、「レクツゲレルドヘイト」（法学）とよばれています。『周礼』に師と儒とを分けて、師とは徳行をもって民を教える者、儒とは六芸をもって民を教える者、と規定しておりますが、これと同じ

趣向と思われれます。しかしながら、人生の急なるものは、病であり、医術がなければ、病人を救うことはできません。それ故、古代の神人は、呪術による治療をも兼ね備えておりました。しかし、これをもってしても、のちには兼ね備えることができなくなつたので、医道専門の学問が興り、西洋人は、これを「ゲネースキユンデ」（医術）とよんでおります。

右三道ニテ人間治生ノ道相調ヒ候得共、僅ニ国ヲ治ルノミニテ、一地球ヲ済度致ノ楷梯無之、依之、物理ノ学相興リ、氣類ハ濛氣風雲ヨリ、下諸物發生ノ理形類ハ日月星辰ヨリ、下草木昆虫ノ理ヲ發明仕候学ヲウエースベゲールデト申候。右四学互ニ相資リ、其歸 ツツマリ、八皆大道ノゴットレイキノ意ニ御座候間、此ヲテイケンキユンデト申候。依之、唐土ノ人ノ「其国善世王アリ、治世王アリ、僧王ノ勢ヒ民王ノ上ニアリ」ト申趣ニ御座候。乍去、国々其通ニモ不參候得共、筋ハ右之趣ニ御座候。

右の三つで統治の道が整備されましたが、わずかにそれだけでは、一国を治めるにとどまり、全世界を救済することはできません。そのために、物理の学がおこりました。それは、大気風雪から諸物發生の理までをきわめ、日月星辰から草木昆虫にいたるまでの理をきわめるものであり、これを「ウエースベゲールデ」（哲学）とよびます。この右の四つの学はたがいに補いあいながら、究極においてみな大道の「ゴットレイキ」に帰することを目標としておりますので、これを「テイケンキユンデ」と申します。このことにより、唐人の人が「その国、善世王あり、治世王あり、僧王の勢い、民王の上にある」と指摘しているとおりです。しかしながら、すべての国がそのとおりである、というわけではありませんが、大筋は右の通りであります。

己ニ露西亞ノ北ノ又北ナル国ニ御座候處、「ペートル」ト申英主出候テ、西ハ蘇亦齊亜ノ一部ヨリ、東蝦夷ノ界、止伯里亜地方迄、其長サ三千里、日本里、幅七、八百里併呑 ヲ、リヨウ 仕、右ノ地ヘ道路ヲ開キ、宿駅ヲ建テ、大河ヲ鑿、ホリワリ シ、海船 ヲヤブネ ヲ通ジ、産物ヲ考ヘ、交易ヲ初メ、林野ヲ拓キ、新都ヲ建テ、教院ヲ開キ、民ヲ教ヘ、諸国ヨリ帰化致候モノ二十万三千五百七十七人、文武学場ヲ建テ、土ヲ造リ、数十度ノ大戦ニ勝利仕、世界第一ノ大帝國ト相成事。僅ニ「ペートル」一代ノ内ニ成就仕候。ペートル殂シ候

八、千七百二十五年、即享保十年ノ事ニ御座候。

すでにロシアは、極北の国でありながら、ペートル（ピョートル大帝）という英主があらわれ、西はスウェーデン（スウェーデン）の一部から、東蝦夷の国境にあたるシベリア地方まで、その長さ三千里（日本里）、幅七、八百里にわたる広い地域を征服し、この地に道路を開き、宿駅を設け、運河をつくり、船舶を通じ、産物を集め、交易をはじめ、林野を開発し、新都をつくり、寺院を設け、人民の教化につとめ、諸国より帰化した者が、二十万三千三百五十七人に達したということであります。学校を設けて文武の教育に力を注ぎ、数十度の戦争に勝ち、ペートルのわずか一代で世界最大の帝国となりました。ペートルが死んだのは、一七二五年、即ち、わが国の享保十年のことです。

又近頃北亜墨利加ノ内ニ、「レピユフレイキ」、又名ハ、「フルエーニグテ」スターデン、ト称シ候国有之。今ヨリ二百年已前、荒漠、アレチ、ノ地ニ御座候処、和蘭陀・英吉利亜・私郎察ヨリ民ヲ移シ、教ヲ設ケ、土地ヲ拓キ、耕ヲ教ヘ候処、英吉利亜兼併、ヲウリヨウ、多ク相成、大抵同国ノ領地ト相成候。然ルニ、政事過刻（過酷）ニテ、土着ノ者堪力ネ、兵ヲ起シ、英吉利亜ニ背キ、自立ノ国ト相成候。

また近頃、北アメリカ州のなかに、「レピユフレイキ」（共和国）、またの名「フルエーニグテ」スターデン」（合衆国）と称する国が生まれました。今から二百年以前、荒地でありましたが、オランダ、イギリス、フランスの諸国が植民をはじめ、宗教を伝え、土地を開き、農業を教えました。ところが、イギリスが勢力をひろげ、大半が同国の領土となってしまうました。しかし、イギリスの政治が過酷なので、住民が我慢できず、反乱をおこし、イギリスとたたかって、独立しました。

是ハ千七百七十六年、安政六年、ノ義二御座候。是ヨリ土人相談仕、別ニ君長ヲ相立不申、賢オヲ推テ官長ト致シ、百官ヲ設フケ、會議、サウタン、共治トモニサメル、ト仕候。「フルエーニグテ」スターデン、ト申ハ、即コノ義二御座候。此国俄ニ強大ニ相成、元来十三州ノ処、唯今二十四州ト罷成、経度

二百二十五度ヨリ三百五十八度ニ及、緯度二十四度ヨリ五十四度ニ相亘リ、地方積十一万二千四百六十六「マイル」。「マイル」ハ一時程、皇国ノ二里弱、大抵唐土・西域ヲ合シ候程之大国ニ御座候。

これは一七七六年（安永六年）（正しくは安永五年）のことです。独立後、住民は相談して、別に君主をおかず、賢オの者を推薦して官長とし、官僚制度をととのえ、「會議共治」といって、相談してとに治める、という体制をつくりました。「フルエーニグテ」スターデン」というのは、この体制をさしていったものであります。この国は、たちまち強大になり、もとは十三州しかなかったものが、現在は二十四州となり、経度は二百二十五度から三百五十八度におよび、緯度は二十四度から五十四度にわたり、面積でいうと、十二万二千四百六十六マイル（マイル）（マイル）は、単位の長さ、日本の二里弱）、おおよそのところ、唐土本土と中央アジアを合わせたほどの大国であります。

人口一書ニ、一億四百二十四万ト有之、即千八百二十年、十七ノ時國ノ惣計《略志》。一二十零二十万（プーランツン）。右之通二付、未考不申候。ハ、諸地志区々ニテ審、ナラス候得共、欧羅巴人計七百万八千人、内七百万人ハ英吉利亜人ノヨシ。寒暖相半バ致シ候土地ニ付、五穀ヲ始メ諸産物多ク、金・銀・銅・鉄・亜鉛、トタン、ノ類、尤夥敷、亜墨利加ハ金銀多ク出候由ハ、諸地志ニ載セ有之候。

人口『略志』『プリンセンの地理教科書の訳書』には、一八二十年現在、十七州の総計として、一億四百二十四万、また『プーランツン』には、一二万とあり、諸書とも記すところがまちまちなので、いまだ正確な数字は考えつきません。は、諸地方によりさまざままで詳細なことは不明ですが、ヨーロッパ人だけでも七百八十五万人、その内七百万人はイギリス人である、といわれております。寒暖がなかなばずる、という土地柄なので、穀物をはじめ産物が多く、金・銀・銅・鉄・亜鉛（トタン）の類を、もつとも大量に産出します（アメリカが金・銀を多く産出することは、どの地理書にも載っております）。

何一ツ他国ヲ相待候事無之、依之、教政物理ノ学盛ニ行ワレ、外国ノ諸書ヲ翻  
訳仕、又「ダグエンウエーキブラーデン」ト申、風説・記録ノ類、板行仕候  
場、三百六十四所、書籍梓行ノ場、六百所有之、軍官八海陸相分ケ候得共、陸  
軍尤多ク、十六歳ヨリ四十歳迄ノ強力ノ士卒八十万人、軍艦八僅ニ大船十二艘、  
中船二艘、小船五十艘、常八陸軍一万余備へ、每澳「ストームポート」ト申、  
守備ノ船ヲ設ケ置候。

ですから、何一ツ他国に依存するものがありません。このような豊かな国な  
ので、教・政・物理の学がさかんで、外国の諸書を翻訳し、また「ダグエン  
ウエーキブラーデン」(日刊および週刊新聞)といつて、風説や記録を載せ  
たものを出版しております。その場所は、全国で三百六十四カ所、書籍出版  
の場所は六百カ所あります。軍事制度は、海軍および陸軍に分けられていま  
すが、陸軍がはるかに人数が多く、十六歳より四十歳までの強健な士卒が十  
万人もおります。海軍はわずかに大型船十二艘、中型船二艘、小型船五十艘  
あるにすぎません。陸軍の場合、一万の常備軍をもつて、港ごとに「ストー  
ムポート」(蒸気船)とよばれる守備用の船を備えております。

右之通、世界第一ノ殷富ノ国ト相成候事、僅ニ三十年ノ間ノ由、洋書、フランス  
ゾント申書名、二相見へ候。是必古へ教化広カラズ、物理審ナラザルノ世ニ決テ  
無之事ニテ、晩出ノ国ノ相開ケ候事、実ニ意料ノ外ニ出候義ニ御座候。  
一、西夷共物理ノ学ヲ専ニ仕候故、天地四方益審ニ相成、一國ヲ以テ天下ト不  
仕、天下ヲ以テ天下ト仕候義、頗規模、キリヤウ、ヨ広張、オシヒロメル、仕  
候風有之候。其国帝王ノ位ニ即キ候得者、宇内、セカイ、御撫、ヨノレノモノ  
ニスル、ノ印ヲ帯ビ、又老婦ノ五兒ヲ撫育、ソダテル、致候絵板、ガク、ヲ座  
右ニ掛ケ候由、五子八五大洲ノ警ニ御座候。已ニ英吉利亜国王、千六百五十五  
年、寛文五年、「メダイリ」ト申賞金、ホウビキン、へ、我四海、セカイ、ヲ統  
轄、ワガモノ、セント鑄サセ、諸臣ニ賜リ、氣勢ヲ励シ候義有之候。尤國ヲ有  
チ、民ヲ保子候得者、自張、キバリ、可致八自然ノ理ニ可有之候得共、亜細亞  
諸國八人性善良、ヨキセイ、温雅、ミヤビヲトナシ、ニ御座候得者、視聽、グ  
ワイブン、ヲ誇飾、ホコリカザリ、仕候而巳ニ御座候得共、

このように、世界でもっとも裕福な国となったのは、わずかここ五十年の間  
のことであるとは、『フランツソン』という洋書に見えております。このよ  
うなことは、教化の範囲がきざられ、物理の学に通じない古代には、決して  
おこりえないことで、遅れておこった国がたちまちに文明化することは、ま  
ことに想像を絶するものといわなければなりません。

一、西洋人は物理の学をもつぱらきわめた結果、世界の事情がますますつま  
びらかになりました。そのためかれらは、一國だけを天下とみなさず、天下  
をもつて天下とみなし、領土を拡張しようとする傾向があります。西洋諸國  
の王は、位につくと世界征服をあらわすシンボルを身につけ、また老婦人が  
五人の児を育てる額を居室にかかっているということです。五人の児は、五  
大洲にたとえたものであります。すでにイギリス国王は、千六百五十五年  
(寛文五年)正しくは明暦元年)に「メダイリ」(勲章)といつ名の賞金に  
「われ世界をわがものとせん」という言葉を鏤させて、諸臣に賜り、励ました  
ということもあります。もつとも国内が安定すれば、勢力を外部に拡大しよ  
うとするのは、自然の理といふべきでしょうが、アジア諸國は、人柄が善良  
温雅なので、外見を飾るだけにすぎません。

清張甄陶ガ上ニ廣督(論) 制馭澳夷状ニ、蓋澳夷惟利是知。別無膽識。商人服飾  
麗都。錢射充物。可以取重於夷人。云々。此広東府ノ澳門ト申島ハ、明ノ初、  
暹羅・占城・爪哇・琉球・泥ノ諸國へ、広東ニテ互市ヲ許サレ、正徳中ハ高州  
ニテ致シ、嘉靖中ヨリ澳門ニ相成候、然ルニ仏郎機・暹羅・占城・滿刺加等ノ  
國々ヲ恣ニ致候様相成、右ノ國々ト一同、澳門へ参リ、交易仕、唐土ニテ八  
様ナル国故、初ハ心附不申力、後々仏郎機ト心附候得共、是又印度近辺ノ國  
ト存、其儘制シモ不致事ト相見、後追々仏郎機、交易場ノ司ト相成候ニテ、初  
テ心附候得共、致方(ナキ)様ニ被察候。

「清の張甄陶が両広総督に呈上した、澳夷(マカオ在住のポルトガル人)の取  
締りについて論じた上書をみると、「おもつに澳夷は、ただ利を知るのみで、  
道義のわかまえない。かれらは服装を着飾り、財産をもっているので外国  
人の間で重んじられている」とあります。この広東府のマカオという島です  
が、明代のはじめ、シャム・チャンパー(現在のベトナム南部ノ地域)・ジ  
ヤワ・琉球・ボルネオの諸國にたいして、まず広東で交易を許し、ついで正





(現在の神島 撮影渡辺)

「はてしなき海原の天空につらなりて横雲の赤く紫にたなびきたるさま、波のみどり深く黒みたる西人の称する大東洋にして、かの亜墨利加とかいえるわたりもこの海原よりつらなれりと思つに、まことによの外の思ひ生じ、」

神島にて、渡辺華山(参海雜誌より)

徳年間(一五 六)には港を高州にあらため、嘉靖年中(一五二二―五)にいたつてマカオがひらかれるということになったのです。ところがこのころ、東アジアに進出したポルトガルが、シャム・チャンパー・マラッカなどの国々を征服し、これらの国々の船といっしょにマカオに渡来し、交易を行うようになりました。がんらい唐土は大様な国柄なので、はじめのうちは気がつきませんでした。のちになつてこのことに気がついたものの、これもまたインド近辺の国であろうと思ひ、そのまま貿易停止もしませんでした。それからち、しだいにポルトガルが交易場を支配するようになって、はじめて実情を知りましたが、このときにはどうすることもできなくなつて、いたように推察されます。

清ノ趙翼カ外番借地互市ノ説ニ、「仏郎機人因得混入其中。後仏郎機併滿刺加・呂宋二国。勢力独強。諸国人之在濠鏡。皆畏之。遂為專拋云々」右之通、島中ヲ専ラニ任、城ヲ築キ、寺ヲ建テ、妻子ヲ帯ビ、大凡二万口計。其中、南番人及唐土ノ人ノ邪教ニ入り候モノ多ク御座候由。張甄陶ガ「隠如敵国」ト申候通ニ御座候。依之、唯今ニテハ、清朝ニテモ困り候由ニ候得共、事ノ生ズルヲ恐リ、且広東地方瘠地ニ候間、此交易ニテ立行候場モ有之、旁々忍ビ居候様子ニ相聞ヘ候。

清の趙翼の「外番借地互市」という論説には、「ポルトガル人は、はじめ東南アジア諸国の商人にまじつて、マカオに渡来し、交易に従事したが、のちにいたり、マラッカおよびブルソンの両国を併呑し、ひとり勢力をほしいままにするようになった。そのためみんなポルトガル人をおそればかっている。そしてついにマカオを占領するにいたつた」とあります。右のとおり、ポルトガル人は、島じゅうを占領し、城を築き、寺を建て、妻子を呼び寄せ、その人口はおよそ二万人もあり、そのため東南アジアの人民および唐土のうちには、邪教に入信した者もすくなくない、といわれております。張甄陶がこれらを指して「隠として敵国のごとし」といつております。そのため、現在では、清朝でも取扱に困つていふことではありますが、紛争の生ずるのをおそれ、また他方、広東地方はやせ地なので、交易に依存せざるをえない、という事情もあつて、我慢しているように聞いております。

つづく

## 田原藩の参勤交代について

財団法人華山会  
理事 加藤寛二

江戸時代諸大名が一定の時期を限って江戸に伺候することを参勤といひ、交代の期になつて封地に就くこととの総称である。参勤交代とは、將軍に対する大名の、主従関係の表示としての拝謁、勤役を前提とした上洛。当事者間には御恩し奉公の主従関係が成立する。「参勤」の語源は、鎌倉・室町幕府の評定衆や奉公人らの出仕制にはじまり、室町幕府は、將軍の直接支配下にある守護大名に対しては、京都に屋形を構えて集住することを強制し、將軍の賜暇を得ず勝手に出国、在国を許さなかつた。織田信長は、大名を岐阜城、安土城に参勤させた。豊臣秀吉も、大阪城、伏見城の周辺に諸大名の邸宅をおき、その領国とを往復させる一方在京賄料などを給した。特に秀吉は大名妻子の在京、家臣とその妻子の城

下集中を全国的規模で強制して、参勤交代制の雛形を完成させた。徳川家康が天下の覇権をにぎると、大名の江戸参勤とその妻子の江戸居住とし、屋敷地を下賜する。また、幕府の老中、若年寄、奉行などは定府であつた田原藩は、一万二千石で譜代大名である。一年在府、一年在国、田原藩は、五月が交代の時期である。田原藩二代藩主三宅備前守康雄公の正徳二年のとき、二〇八人の供揃えで、日本橋より田原迄宿里程並本陣宿を下記に掲げる。総費用は四〇〇兩〜四五〇兩である。

参考文献

国史大辞典  
田原藩日記



### 日本橋ヨリ田原迄宿里程本陣宿

正徳二年(一七一二)

宿名	里程	本陣	宿名	里程	本陣
品川	日本橋から二里	川鶴十郎左衛門	江尻	一里二丁	寺尾与右衛門
	大郷渡し		鳩打川	二里二十丁	油井平左衛門
川崎	二里十八丁	田中兵庫	府中	二里二十丁	望月次右衛門
金川	二里十八丁	鈴木源太左衛門	鞠子	一里十八丁	横田三左衛門
程ヶ谷	一里十八丁	大須加武右衛門	瀬戸川		
戸塚	二里十八丁	沢部九郎右衛門	岡部	二里	内野九兵衛
藤沢	二里	堀内勘左衛門	藤枝	一里二十六丁	青嶋次右衛門
平塚	二里十六丁	加藤七郎兵衛	嶋田	二里	村松九郎次郎
大磯	二十丁	小嶋才三郎	金谷	一里	柏屋八郎左衛門
	酒匂川		日坂	一里二十四丁	片岡清兵衛
小田原	四里	窪田七右衛門	掛川	一里二十九丁	沢野弥三右衛門
箱根	四里八丁	柏屋佐五右衛門	袋井	二里十六丁	太田八藏
三嶋	三里二十八丁	樋口伝右衛門	見附	一里十八丁	植村清兵衛
沼津	一里十八丁	清水助左衛門	浜松	四里八丁	杉浦助右衛門
原	一里十八丁	庄司六郎兵衛	舞阪	二里十丁	宮崎伝右衛門
	富士川舟			舟渡し	
吉原	三里	神尾六左衛門			
蒲原	三里	滝縫殿右衛門	新井	一里	飯田武兵衛
油井	一里	岩鍋郷右衛門	白須賀	一里二十二丁	大村庄左衛門
	沖津川		二川	一里十七丁	後藤五左衛門
沖津	二里十六丁	市川新左衛門	田原	五里	広中六太夫

大江戸日本橋より田原迄七十五里三十二町(三六町を一里)

■ 泊  
■ 休



渡辺華山の「自律狂歌草稿」鑑賞 (10)

四十一、春八さり

(狂歌)

春八さり夏八とりと  
いそかしく  
あわれことしの秋もいぬめり

(狂歌の意)

春は去り、夏はあれこれと忙しく、ああ、今年の秋も(何のかいもなく)過ぎていくようです。

(本歌)

藤原基俊

ちぎりおきしさせもが露をいのちにて  
あはれ今年の秋もいぬめり  
百人一首・七五

(歌意)

約束をしてくださった(お言葉)を(さし)も草の露とも思い、(それだけを)心のたよりとしてきましたが、ああ、今年の秋も(何のかいもなく)過ぎていくようです。

(鑑賞)



本歌の作者藤原基俊は、僧であるわが子の光覚を興福寺の維摩経の講師にしたいと思い、そのことを時の太政大臣藤原忠通にお願していた。だが、内諾を得ていたにもかかわらず、忠通は約束を果たさず、光覚は講師になれなかった。この本歌はその恨み言を歌を通して忠通に伝えたもので、基俊のわが子を思う切々たる気持ちと、裏切られた嘆きが詠われている。

狂歌は、その本歌の下の句「あはれ今年の秋もいぬめり」を本歌取りしたものであるが、本歌のように複雑な思いは込められてはいない。春が来て、夏が来て、秋が来てと、ただ忙しく過ぎていく月日への嘆きが詠われているもので、狂歌とはいっても、笑いやペーソスを色濃く感じさせるものにはなっていない。やや平凡に

終わってしまったのが惜しまれる。

四十二、雨乞いに

(狂歌)

雨乞いにかり着を  
したる神主が  
はげしかれと八祈らぬものを

(狂歌の意)

雨乞いをするのに衣が無くて借り着をした神主が、激しく降れとはいいのらなかったのに、(雨が激しく降って、折角借りた着物が雨に濡れてしまったこと)だ。

(本歌)

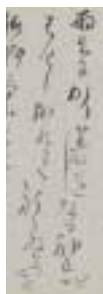
源俊頼朝臣

憂しかりける人を初瀬の山おろしよ  
はげしかれとは祈らぬものを  
百人一首・七四

(歌意)

初瀬の山から吹き下ろす風よ。私につれなかつた人を(こちらになびくように)初瀬の観音にお祈りこそしたが、お前のように(ますます激しくなれとは祈らなかつた)になあ。

(鑑賞)



本歌は、やや難解であるが、初瀬の風のことよせてつれない恋人に対するままならぬ思いを詠んだものである。狂歌は、その本歌の下の句「はげしかれとは祈らぬものを」を風から雨に取り替えて、借りた衣を濡らしてしまった神主の残念な気持ちを詠んだものとしている。神主が雨乞いをするのに借り着をするというのは、何となく変な感じがしないでもないが、自らの祈りの効果があまりすぎて、借りた衣が雨に濡れてしまつたということにユーモアがあるのである。

四十三、梅柳

(狂歌)

(本歌)

前中納言匡房

梅柳争ふ春を

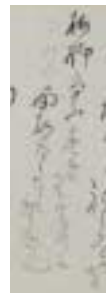
見かねて八

外山の霞たゝすもあらなん

(狂歌の意)

梅と柳が春の来るのを争う様子を見かねては、人里近い山の霧よ、(願わくば)立ちこめないでほしいものだ。

(鑑賞)



本歌の「高砂」は特定の地名ではなく、高く砂の積もった山のことである。「をのへ」は「尾の上」で山の稜線、峰のこと。「とやま」は「外山」で、人里近くの山。

「たたずもあらなむ」は、「なむ」があつらえ望む意の終助詞であるので、立ちこめないでほしいの意となる。主題は、霞に桜を愛でるのを妨げないでほしいと訴えた歌である。

狂歌は、その本歌の下の句「とやまのかすみたたずもあらなむ」を本歌取りして、桜を梅と柳に置き換えてすり替えによる面白さをねらったものである。平明な本歌とくらべると狂歌はやや理屈っぽい感じの歌になっている。やや平凡に終わった感があるが、こつした素材の取り替えによつても簡単に一首の狂歌が成立するようなところにまた江戸庶民の間に狂歌が流行をみた一因があつたよつである。

四十四、親の時

(狂歌)

親の時ためたる財布いたゝけと  
なあまりあるむかしなりけり

高砂のをへの桜さきにけり  
とやまのかすみたたずもあらなむ

百人一首・七三

(歌意)

高い山の頂の桜が咲いたことだよ。人里近い山の霧よ、(願わくば)立ちこめないでほしいものだ。

(本歌)

順徳院

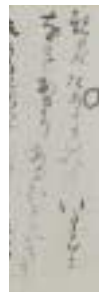
ももしきやふるき軒端のしのぶにも  
なほあまりある昔なりけり

百人一首・一

(狂歌の意)

親のいた時ためた財布をいただいた。その財布を見るにつけても、いくらなつかしんでもやはりなつかしみ尽くせない、なつかしい昔であることよ。

(鑑賞)



本歌の「ももしき」は「百敷」で皇居のこと。「ふるき軒端」は古びた軒端のこと。承久の乱(一一二二)によつて荒れ果てた皇居の建物の軒端の様子を意味している。又、「しのぶにも」は忍ぶ草を見るにつけても、昔をしのぶにつけても両方の意味を表している。「なほあまりある昔なりけり」は、やはりいくら懐かしんでも懐かしみきれない昔であることだよ、華やかに繁栄していた昔のころの皇居を懐かしんでいるのである。主題は、この「なほあまりある昔なりけり」にある。

これに対して、狂歌はこの本歌の「なほあまりある昔なりけり」を本歌取りして、親に生前貰つた財布を目の前にして、子が親を懐かしむ歌に変えている。本歌の洗練された格調の高い新古今の世界が、親の財布によつてぐっと現実の世界、世俗的な世界へ引き戻されてくるところにおかしみがある。

親の溜めた金の入つていた財布をしみじみと懐かしむようでは、この息子はおそらくは親の残した身代をすっかり食いつぶした放蕩息子か、生活力のない道楽息子ではないかなども想像されて、しみじみしたおかしみが湧いてくるのは恐らく筆者だけではあるまい。

四十五、有かねと

(狂歌)

有かねと思へとかなし落富に  
かけしや袖のぬれもこそすれ

(歌意)

宮中の古びた軒端にはしのぶ草が生えていたけれど、そのしのぶ草を見るにつけても、いくらなつかしんでもやはりなつかしみ尽くせない、なつかしい昔の御代であることよ。

(本歌)

祐子内親王家紀伊

音にきくたかしの浜のあだ波は  
かけしや袖のぬれもこそすれ

百人一首・七二

(狂歌の意)

ある金だと思つても哀しいものだ。はずれの富くじにお情けはかけないよ。涙で袖が濡れたりすると困るから。

(歌意)

世間で評判の高い高師の浜のあだ波は、袖にはかけますまいよ。波で濡れては困りますから。そのように、評判の高い浮気なあなたお情けは受け入れませんまい。(あこで心移りされて)涙で袖が濡れたりますと困りますから。

(鑑賞)



本歌の意味は、表面上は高師の浜のあだ波は袖にはかけませんよ、濡れては困るからと高師の浜にむやみと立つ波を詠んでいる。しかしそれはあくまでも表面的な意味で、「あだ波」はこの場合は人の心が波のように定まらないことのとえてある。

「かけじや」も、あなたのお情けは受け入れませんよといつ拒否の意味がこめられ、「袖のぬれもこそすれ」も涙で袖が濡れると困るからの意味で、男の浮気に泣かされることに対する警戒の気持ちが入められており、本歌の全体が隠喩によって巧みに構成されている。その修辭の巧みさと構成の巧みさには、この作者の並々ならぬ表現力が窺われる。

狂歌は、その本歌の下の句「かけじや袖のぬれもこそすれ」の本歌取りであるが、複雑な女心を詠った恋歌である本歌を一転して、富くじに外れた者をなじる歌にしてしまつところに面白さがある。

四十六、夏衣

(狂歌)

夏衣脱んとすれ(八) 銭こまのあしの丸や(に) 秋風そぶく

(本歌)

大納言経信  
夕されば門田の稲葉おとづれて  
芦のまるやに秋風そ吹く  
百人一首・七一

(狂歌の意)

夏の衣を脱ごうとすると、銭独樂が足下に転がり出た。芦葺きの粗末な小屋に秋風がさびしく吹くことである。

(歌意)

夕方になると、家の前の田の稲の葉がさわさわ音を立て、芦葺きの粗末な小屋に秋風がさびしく吹くことである。

(鑑賞)



この本歌は、『金葉和歌集』・秋(一八三)にも載っており、「師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて田家秋風といへる事をよめる」という詞書がある。「夕されば」の「されば」は「…になる」の意味。「門田」は「山田」に対するもので、家の前の田のこと。作者は、角田の稲葉や芦のまるやを吹き抜けていく爽やかな秋風を視覚と聴覚の両方で巧みに捉えている。

狂歌は、その本歌の下の句「芦のまるやに秋風そ吹く」を本歌取りして、卑俗化させ、夏の衣の裾から「銭独樂」が転がり出たことと、おかしみを誘おうとしたのである。

この「銭独樂」というのは、聞き慣れないことばであるが、一文銭を六、七枚、又は十枚ほどに重ねて、銭の穴に短い管を通し、その中に軸木を挿して心棒とし、糸を巻いて「独樂」のように回すもののことである。

小判や朱銀ではなく、そんな「銭独樂」が転がり出るところに、貧しい庶民の生活があり、生活の哀感がにじみ出ているのである。

渡辺華山の『自律狂歌草稿』は、以上みてきたように四十六首で終っている。なぜ四十六首なのか、理由はさだかではないが、おそらくは、華山に依頼した熊野社祭礼の青年たちもこの位あれば充分と考えて、華山にそのことを申し出たのである。

研究会員 山田哲夫

妄評多謝(終)



## 華山の田原行（二）

一月二十四日

浄智寺住職に惜しまれつつ出立した華山は、唐沢・綿打を通り、藤沢に出ます。経路から考えると、鎌倉街道の上道を通ったと思われます。（参考「歴散加藤塾・鎌倉古道」<http://fukushima.cool.ne.jp/katohjuk/>）

藤沢で、前夜ここに宿泊した従者の定右衛門と勘吉と合流します。前日に「両掛」鎗などは先に藤沢にやりて、定右衛門を具し天王橋といふ川にそひて南に入る」という記述があるので、勘吉に両掛（りょうがけ）衣類等の入った二つのつづらを天秤棒で供の者にかつがせたもの（を）をかつかせ、鎗を持たせ藤沢に行かせ、鎌倉には途中まで定右衛門と行ったと思われる。

従者の宿泊した宿屋でも、華山は絵を求められます。華山の画家としての名声は広まっていたことが分かります。その後、風邪のため、駕籠で小田原まで行きます。宿泊した伊東屋は、商人の宿で、大変騒がしく、華山は、奥の部屋をあてがわれます。たまたま隣室には男女がいて、女に言い寄る農夫と、それをこぼむ女の様子が書き記されています。

一月二十五日

未明に駕籠で宿を出立した華山は、風祭で駕籠を下ります。あたりの様子や豊臣秀吉が北条征伐した際、一夜城を築城したと言われる石垣山の様子を記します。その後、紹太寺に行き、石碑を見学し、畑宿で食事をします。



箱根 三十三次東海道版永保堂

箱根の関所を越えるあたりで降雪を体験し、江戸屋で食事をします。その後、宿場人足が誠実なので酒銭を与えます。「猶雪ふかく寒気もまた甚し」という箱根峠を過ぎ、「老平に到る頃風吹天晴、富士にいたる」とあります。

「老平」は大平台か、親鸞の碑のある笈の平と考えられますが、これらは、箱根の関所より江戸寄りなので、華山の記憶違いか、他に「老平」にあたる土地があるのかもしれません。「富士」は、芭蕉の句碑のある富士見平と考えられます。これらについては、現地を調査をし研究される方の成果を俟ちたいと思います。

「富士」では、雲が多く、富士山をみることはできませんでしたが、「老平」から「富士」の間に加勢屋と兵衛の人馬施行小屋があります。宿場人足の話では、加勢屋が千両を小田原侯と江川英龍に差し出して願出たのでこの小屋を作り、飛脚等がここで休憩することにより、便利になつたらしいのです。

山を下る頃に日没となります。ここでも宿場人足から聞いた愛宕山麓の馬についての話が記してあります。昔は馬一匹で一両だったのが、今は馬一匹で五・六両から七八両で、その上馬の質が落ちているといつこととです。

午後六時過ぎ、三島に到着し綿屋に宿をとります。ここでも絵をもとめられます。そこで、絵をかき、就寝となります。

一月二十六日

暗いうちに宿をたち、沼津で朝をむかえます。沼津には、大平屋という宿屋があります。その主人・菊裕は、華山の知り合いで、元々は（不明）忠左衛門の家来でしたが、絵を好み、家を出しましたが、大平屋の入り婿となりました。大平屋は家の造りが大きく、沼津一です。朝が早かったため、伝言を書き、立ち去ろうとしますが、菊裕が出てきて、旧交を温めます。帰路に立ち寄るところを約束して立ち去ります。



全樂堂日録

その後、原宿で休憩をします。ここで、宿場人足から浜でマグロの漁をしていることを聞きます。漁の声も聞こえてきます。そこで、駕籠と両掛を先にやり、一人で浜に出て、漁の様子を見ることにします。浜では、獵師がたくさん集まって網を引いていました。

ここで、華山は、漁の仕方を観察しています。かつて渥美半島で行われていた地引網と似た漁法です。経験豊富な老獵師が海の色を見、どんな魚がいるか判断し、人々を呼び集めます。そして、漁師六人が二艘の小舟に分かれ、老漁師の指示に従い魚群の前と後ろに網を降ろします。漁の様子がよほど印象的だったのか、海にかかる網の様子を絵で示し、「系網」「縄網」「袋あり」「ヨモリ」という説明を入れていきます。

二艘の小舟は浜に戻り、村から出てきた老若男女が二手に分かれ、網を引きます。舟は沖に戻り、網が均等に引けているかを見ます。最終的に網を引き上げる時に慣れた人が海に入り、網の袋に魚が入るようにし、網から逃げるのを防ぎます。そして、魚を一尾一尾獲り出します。これが、小さなマグロです。

捕まえたマグロは、えらの間から手を入れ、「エラ胆を掴みだせば口より血をはきて死す」と、しめる様子を記しています。「エラ胆」がほしい人は、小さな箱を持って来て、自由に拾っていて、この様子を華山は、「いと愉快事なるかな」と記しています。



保永堂版東海道五十三次 原

その後、柏原に行きますが、朝から降っていた雨に雪が混じります。ここで、蛭を捕まえて、その大きさがまぐりのように名物であると記しています。そして、この日は、吉原、蒲原、由井を経て、興津に宿をとります。雨は依然やまなかつたようです。

ここまでの華山の宿泊地をまとめると、「戸塚 鎌倉 小田原 三島 興津」となります。作り話ではありませんが、同時代の十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の弥次さん喜多さんの宿泊地は、「戸塚 小田原 三島 蒲原」となっていて、華山の旅程とほぼ一致しています。他の文献にもあたってみる必要がありますが、華山の旅程は、江戸時代の平均的な旅程といえるのかもしれませんが。（続）

研究会員 柴田雅芳

下田市泰平寺戸田忠次公墓所と黒船来航の史跡を訪ねて

華山・史学研究会研修視察

平成一八年度華山・史学研究会  
 修視察は、一〇月二八、二九日、一  
 泊二日で行われました。今回の視察  
 は、静岡県下田市の泰平寺に眠る戸  
 田忠次公の墓所と、黒船来航の史跡  
 を訪ねるものでした。

当日は、新幹線、伊豆急線を乗り  
 継ぎ、午後一時頃下田に着きました。  
 改札口で横浜の中村さんと合流し  
 て、参加者は総勢九名となりました。

まず、忠次公の墓所のある泰平寺  
 へ向いました。泰平寺は、駅から徒  
 歩約一〇分位の所にある臨済宗のお  
 寺です。「マイマイ通り」という幹  
 線道路を歩いて行くと、案内標識が  
 あり、そこを曲がると、正面奥にひ  
 つそりと本堂が佇む、山門もない小  
 さなお寺が見えました。大きなお寺  
 を想像していましたが、意外でした。  
 戸田忠次公の菩提寺らしさを示すも

のは、本堂屋根の六曜紋(戸田氏の  
 家紋)と境内にある教育委員会が設  
 置した説明板のみでした。

忠次公の墓は、本堂裏の墓地の奥  
 に、石垣に囲まれてありました。墓  
 石の正面には、「英歳寺殿賜從四位  
 下傑秀玄雄大居士神儀 慶長二丁



酉歳六月廿三日」と刻まれていまし  
 た。左右にも銘文が刻まれており、  
 銘文の文字を確認し、墓石の写真を  
 撮りました。



その後、本堂前にて、戸田一族に  
 詳しい加藤克己先生の解説を聞きま  
 した。先生の話によると、戦国後期、  
 戸田康光、堯光親子が今川義元に滅  
 ぼされた時、康光の弟、戸田光忠は  
 岡崎に逃れ、その子に当たるのが忠  
 次だということです。忠次は徳川家

康の家臣となり、家康の関東移封に  
 伴い、下田五千石を与えられ統治し  
 ますが、慶長二年(一五九七)下田に  
 て死去し、泰平寺に埋葬されます。  
 忠次の墓は、その子尊次の三河移封  
 と伴に、三河田原に移されますが、  
 尊次の孫に当たる戸田山城守が、元  
 禄三年(一六九〇)に泰平寺に再建  
 し、この墓が現在の墓だということ  
 です。

その、再建の事実が、墓碑の左側  
 面に、「今茲元禄三歳旅庚午秋八月  
 総州佐倉城主從四位下行兼山城守藤  
 原忠昌朝臣重建之」と刻まれていま  
 す。

さて、一行九名は、さらに徒歩に  
 て、日米和親条約締結会場の了仙寺  
 日露和親条約の長楽寺を視察し、下  
 田港へ向かいました。下田港では、  
 ペリー艦隊上陸碑を視察しました。  
 帰路、唐人お吉が経営した安直樓の  
 前を通り、夕暮れ迫る下田の街を歩  
 いて宿へ向かい、一日の行程を終了  
 しました。





翌日は、まず宿の横にあるロープウェイに乗り、寝姿山へ登りました。そこからは、ポータハン号を旗艦とする七隻の黒船が投錨した下田湾を一望の下に望むことができます。幕末にも黒船見張所が設けられていたそう、その復元がありました。

次に日本で最初に米国総領事館が開設された玉泉寺を視察しました。玉泉寺は、下田駅から車で約一〇分の高台にある曹洞宗のお寺です。



安政三年（一八五六）から二十年十月の間、米国総領事館となり、幕末開国の舞台となった場所です。現在も本堂の中に、総領事ハリスの部屋と、通訳ヒュースケンの部屋が当時のまま保存されています。本堂側面の壁には、ストーブの煙突の穴まで当時のまま残されています。

その横を通り奥へ進むと、墓地があり、ペリー艦隊乗員五名の墓がありました。墓は眼下に下田湾を見下

ろす高台にあり、はるか彼方の故郷を見つめているようでした。

本堂横には、ハリス記念館がありました。入口を入ると、ハリスと唐人お吉の等身大の人形の展示があり、奥へ進むと、ペリー艦隊乗員の墓を写した日本最古の銀板写真、ハリスの遺品、柿崎村名主の日記等の古文書ほか多数の資料を見ることができました。

当日、解説して頂いた住職の話では、領事館開設に当たり、下田奉行所の命令により、本堂の仏像や仏具はかたづけられ、本堂での仏事は一切できなかつたとのこと。唐人お吉だけでなく、幕末の外庄の中で様々な負担を強いられた玉泉寺や、その周囲の人々の苦勞が偲ばれました。

その後、広大な雑木林に囲まれた須崎御用邸の横を通り、水仙の名所、爪木岬へ行きました。さらに、下田港へ戻り、吉田松陰が黒船への密航を企てた弁天島等を視察し、一日目の予定を終えました。



帰路、熱海へ向かう特急の車窓には、晩秋の穏やかな陽光を浴びて光る、べた凧の伊豆の海が広がっていました。しかし、幕末、波乱に満ちた伊豆の海で繰り広げられた事件の数々に思いを馳せる時、華山の憂国の念が、懐堂日録の言つような杞憂では決してなかつたことを、あらためて確信させるものでした。

研究会員 中神昌秀



企画展のご案内

三月二十四日～五月十三日

春の企画展「中原悌二郎と岡田虎二郎」悌二郎をめぐる作家達」

(企画展示室)



図版 高村光太郎 手  
大正7年(1918)  
台東区立朝倉彫塑館蔵

同時開催 渡辺華山と椿椿山

(特別展示室)

七月五日～八月二十六日

夏の企画展「生誕一〇〇年記念 生命の賛歌 須田勉太展」

(企画展示室)

同時開催 渡辺華山の書

(特別展示室)

八月三十一日～九月三十日

企画展「没後一〇年 写実と抽象

平常展のご案内

五月十八日～七月一日

渡辺華山と山本葉谷  
浮世絵で見る風景画  
(特別展示室)

(企画展示室1)

役者絵の世界 (企画展示室2)  
常設展示室では渡辺華山の生涯を紹介しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

観覧料

企画展

一般 春 七〇〇円(五六〇円)

夏 六〇〇円(四八〇円)

三〇〇円(二四〇円)

平常展

一般 二二〇円(一六〇円)

小中生 一〇〇円(八〇円)

企画展期間中・毎週土曜日は小中生無料

( )内は二十名以上の団体の料金  
毎週月曜日は休館、月曜日が祝日の場合は翌日、展示替日

渥美郷土資料館からのご案内

四月二十八日～五月二十七日

企画展「端午の節句 鯉のぼりと初風」

企画展示室

入館無料

(財)華山会から

華山・史学研究会会員募集中

華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室

毎月第四土曜日研究会

視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報 第十八号

平成一九年四月一日発行

編集発行 財団法人華山会

理事長 白井孝市

〒四四一-1242

愛知県田原市田原町巴江二の1

TEL 五三二・三三二・一七

FAX 五三二・三三二・一七

編集・協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 渡辺巨祥

吉川利明 林 和彦

山田哲夫 別所興一

林 哲志 中村正字

小川金一 柴田雅芳

加藤克己 中神昌秀

増山禎之

華山会報ご希望の方は華山会館・

田原市博物館にお申し出ください。

次回発行予定 平成一九年十月二日